HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	プロクロス『プラトン『国家』注解』第四論文 日本語訳・注
Author(s)	近藤, 智彦; 川島, 彬; 高橋, 勇真 他
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 169, 41（左）-70（左）
Issue Date	2023-03-27
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.169.l41
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88628
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_169_Kondo_Kawashima_Takahashi_Nomura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 169 （2023）

プロクロス『プラトン『国家』注解』第四論文 日本語訳・注

近藤智彦・川島彬
高橋勇真・野村拓矢

［27.7–8］『『国家』第二巻において述べられている神学的指針[1]について』

【方針】

・本訳の底本としては Kroll を用いた（文献表記については末尾の文献表を参照のこと）。
・底本と異なる読みを採用した場合のほか，底本が諸写本と大きく異なる修正案を採用している場合も，注に記した。
・訳文中の（ ）はギリシア語の原語を，［ ］は訳者による補足を示す。
・注については，本著作に関しては Festugière, Abbate, Baltzly, Finamore & Miles，プロクロス哲学一般に関しては Chlup に負う部分が大きいが，特別な場合を除いてどの文献に依拠したのかを一々記すことは控える。
・プラトン『国家』への参照に際しては，慣例に従いステファヌス版全集のページ数と段落記号（a–e）を付し，段落内の行数表記については Slings に従う。
・節と段落の分割，および［ ］内の見出しは，Festugière, Abbate, Baltzly, Finamore & Miles を参考にしつつ独自に付けたものである。
・各段落の冒頭に Kroll（全 2 巻のうち第 1 巻）の頁数・行数を［27.9–26］のように入れた。
・全体の構成は以下の通りである。

第一部：プラトンの見解の提示（27.9–37.2）
　指針 I の公理「すべての神は本当に善いものである」（27.9–28.23）
　　指針 I–1「神はいかなる悪の原因でもない」（28.23–31.2）
　　指針 I–2「すべての神はただ諸々の善のみの原因である」（31.2–32.13）
　　　指針 I の系「諸悪のイデアは存在しない」（32.13–33.7）
　指針 II：序（33.8–17）
　　指針 II–1「神的なものは変化しない」（33.18–35.17）
　　　指針 II–1 の系（35.17–36.9）
　　指針 II–2「神的なものが欺くことはない」（36.10–27）

10.14943/bfhhs.169.l41

［第一部：プラトンの見解の提示（27.9–37.2）］

［指針 I の公理「すべての神は本当に善いものである」（27.9–28.23）］

［27.9–26］『国家』第二巻において彼［プラトン］[2]が示した神学的指針の中で，彼は第一に，常に神々の善性に狙いを定め，こうしたもの ── すなわちすべての善いもの ── の原因のみを神々に帰し，その反対のもの［諸悪］の原因は神々に帰さないという指針を提示している[3]。その際に彼が前提として措定したのは，「すべての神は善いものである」という公理である。実際，彼が「神（ὁ θεός）は善いものである」[4]と語っているときには，すべての神のことを語っているのだと，まずは理解するべきである[5]。というのも，定冠詞の付加は[6]，他を凌駕するものだけを表すか ── 例えば，もっとも卓越した人

まとめ（36.27–37.2）
第二部：アポリアとその解決（37.3–41.2）
アポリアの提示（37.3–22）
アポリア I の解決「諸悪はどこに由来しているのか」（37.23–39.1）
アポリア II の解決「神々の顕現はどうして生じるのか」（39.1–40.5）
アポリア III の解決「虚偽の神託はどうして与えられるのか」（40.5–41.2）
第三部：結論と補足（41.3–29）

[1] 原語は θεολογικοὶ τύποι（プラトン『国家』379a5）。藤沢は「神々の物語についての規範」と訳している。

[2] プラトン『国家』ではソクラテスが登場人物として語っている議論ではあるが，プロクロスはこれを著者プラトンの見解の提示とみなしていると考えられる。本論文でも，登場人物ソクラテスの議論が著者プラトンの見解として何度か紹介されている一方で（32.5，37.3，41.11，41.19），ソクラテスの名は一度も登場していない。

[3] プラトン『国家』379b1–380c11。

[4] プラトン『国家』379b1。

[5] プロクロスにおける神々とは，厳密な意味では，「一」の階層に座する「分有される一」としての多数の「ヘナデス（単一者）」のことである。しかしプロクロスは，下位の諸階層においても，ヘナデスを分有することによって神的と言われるものが多数あることも認めている（『神学綱要』命題 129，139 他）。このような多様で異なるヘナデスとその現われによって，多神論的な世界観が保証されている。

[6]「神（ὁ θεός）は善いものである」の中の「神（θεός）」という語に定冠詞 ὁ が付いている

［ホメロス］にその［詩人という］語を特別に割り当てて，「詩人（ὁ ποιητής）が語った」とわれわれが述べる場合のように ──，あるいは，その集団全体を表すか ── われわれが「すべての」の代わりに定冠詞を付け加えて，「人間（ὁ ἄνθρωπος）は理性的である」と述べる場合のように ── のいずれかだからである。したがって，このように「神は善いものである」と彼が述べるときには，第一の神についてそう語っているか，すべての神についてそう語っているかのいずれかということになるだろう。しかし，これらの指針が第一の神のみに当てはまるということを彼が意味していないことは，彼がその後で「神々のそれぞれがもっとも美しく，ありうるかぎりもっとも善いものである」[7]という結論を導いていることから明らかである。またそのことは，詩人たちはこれらの指針にしたがって書くべきだと彼が考えているということからも明らかである。というのも，彼ら詩人たちが語っているのは，必ずしも第一の神についてのことというわけではないからである。

［27.26–28.9］したがって，われわれが述べたことが正しければ，このこと，すなわち「すべての神は善いものである」ということを，第一の公理として措定すべきである。『［カルデア］神託』もまた，以下のように述べて人々の不敬虔を咎めている箇所において，その公理を証言している。

> すべての神は善いものであるということを知らないとは。ああ，労苦を負う者たちよ，酔いから覚めよ。[8]

また，『法律』では善性，能力，知の三つが神々を特徴づけると語られている

ことを述べている。

[7] プラトン『国家』381c7–9。プロクロスの引用は正確ではないが，プラトン『国家』の該当箇所でも「（神々の）それぞれ（ἕκαστος）」という語が「すべての神々」の意味で用いられていることは確かである。なお Abbate は，「ありうるかぎり（εἰς δύναμιν）」（プラトンのテクストでは εἰς τὸ δυνατόν）という表現に，プロクロスが「それぞれの神にとって可能なかぎり」という多数の神々の間の位階（注 5，41 を参照）を前提とした意味を読み込んでいた可能性を指摘している。

[8]『カルデア神託』断片 15 des Places。

が[9]，彼は，その第一のもの［善性］を［『国家』第二巻では］第一の指針を通して，残りの二つのもの［能力，知］を第二の指針を通して ── すなわち真理と不変性とが神々においてあると述べることで ──，それぞれ把握している。というのも，これらのうちの一方［真理］は知に関係し，他方［不変性］は能力と関係しているからである。少なくとも，真理は知の完成であり，非受動性は能力の完成である。

［28.9-23］さて以上が第一の公理であるが，それはある必要不可欠な区別とともに措定されている。というのも，彼は端的に「神は善いものである」と述べたのではなく，「本当に善いものである」と述べたからである[10]。彼はこのように本当にそうあるものを本当にそうあるわけではないものから区別することを常としたが[11]，それは前者を反対のものと混ざり合うことのないものとして保つ一方で，後者をすでにより劣悪なもので満たされていると述べることによってである。実際，本当の生とか，本当の知性や美などと彼が呼ぶのは，それらと対立するもの ── すなわち，生のなさ，知性のなさ，醜さ ── のいずれもそれに属することのないものである。他方，本当にこれらの各々であるわけではないものと彼が呼ぶのは，より劣悪な何らかのものが混ざり合っているものである。したがって，すべての神は本当に善いものである。すなわち，善に即してその本質存在を与えられたもの（οὐσιωμένος）であって，善を獲得されたものとしてもつわけでも性向（ἕξις）としてもつわけでもないのである（というのも，このような意味での善いものは，本当に善いものではなく[12]，善を分有したものだからである）。よって，神はそのあり方（ὕπαρξις）そのものに即して善いものであり，まさにそうであることに即して神なのである。すなわち，何か他のものであって次いで善いものである，

[9] プラトン『法律』900c-903a。

[10] プラトン『国家』379b1。

[11] 例えば，イデアとそれを分有する個々のものとの区別は，プラトン『国家』475e-480a で論じられている。また，「本当に（ὄντως）［そう］あるもの」という表現は，イデアに関して『国家』でも 490b5，597c11-d1 で用いられている。

[12] 底本に従い ὄν を挿入。

というのではなく，ちょうど第一者が善そのもの（αὐτο τἀγαθόν）であるのと同じように，善いものそのもの（αὐτοαγαθός）なのである[13]。

［指針 I-1「神はいかなる悪の原因でもない」（28.23-31.2）］

［28.23-29］ともあれ，この一つの公理が措定されると，二つの推論がそこから分岐する。それらの推論を通して示されるのは，すべての神が諸々の善の原因である一方で，いかなる悪の原因でもない，ということである。後者の推論は以下のように進む[14]。

［a］すべての神は本当に善いものである。
［b］いかなる（οὐδέν）本当に善いものも有害ではない。
［c］有害ではないものは害さない。
［d］〈害さないものはいかなる悪をも為さない。〉[15]
［e］いかなる（μηδέν）悪をも為さないものはいかなる（οὐδενός）悪の原因でもない。
［f］よって，すべての神はいかなる（οὐδενός）悪の原因でもない。

［28.29-29.4］以上の推論においては，まずは次のこと，すなわち，「いかなる……もない（οὐδέν）」と「いかなる……もない（οὐδενός）」は前提命題と述語との部分として置かれているということに留意するべきである[16]。さも

---

[13] 第一者が善そのものであることについては，『神学綱要』命題 8。ここで言われているあり方が当てはまるのは，厳密な意味での神々，すなわちヘナデスのみだと考えられる（『神学綱要』命題 119）。注 5 も参照。

[14] プラトン『国家』379b1-10。

[15] 底本や諸訳も補ってはいないが，τὸ μὴ βλάπτον οὐδὲν ποιεῖ κακόν. という一文を挿入。以下では明示的にプラトンが述べているとされ（29.27-28），実際にプラトン『国家』のテクストにも対応する箇所があることから（379b7），プロクロスがここで省略したとは考えにくい。

[16] この箇所に付けられたスコリアでは，次のように説明されているが，その趣旨は残念ながら明瞭ではない。

なければ，主語が「すべての」という付加限定［量化子］をもつことはできなくなるだろうからである。次に留意するべきことは，一つを除くすべての前提命題について，［本来は］肯定命題であるものが，転換（μετάθεσις）によって否定命題のように思われるものとなっている，ということである[17]。そのことは，［最初の前提命題の後に］続く前提命題が，いずれも否定を伴った主語を置いていることから分かる。

［29.4–16］［以上のように］論理的諸定理が適用されている一方で，その諸前提の事実的な側面とその一貫性にも目を向けるがよい。

［a］すべての神は本当に善いものである。

厳密には述語項は「原因」であり，それに［「すべての（πᾶς）」という］付加限定［量化子］（προσδιορισμός）が付けられているのではない（Festugière）［別の解釈：それに「いかなる……もない（οὐ）」という付加限定［量化子］が付けられている（Baltzly, Finamore & Miles）］。これらのことは，大前提において「すべての〈いかなる悪の原因でもないもの〉」とわれわれが述べ，「すべての」という付加限定［量化子］を「原因」に対して付けられたものとしてわれわれが理解してみれば，明らかである。この場合，今や主語である「原因」が，小前提において述語であったことは明らかである。（II 370.28–371.5 Kroll）

この記述を参考にしつつ，Baltzly，Finamore & Miles は，プロクロスの本文で論じられているのも，量化子を述語項に付加することは許されるかという問題（cf. アリストテレス『命題論』17b14）だとする解釈を提案している。この解釈に従うと，量化子は［b］「いかなる（οὐδέν）本当に善いものも有害ではない」のように主語に ── それゆえ「前提命題の部分」として ── 付加されるのみならず，［e］「いかなる（μηδέν）悪をも為さないものはいかなる（οὐδενός）悪の原因でもない」のように「述語の部分」として付加されることもある，と論じていることになる。

[17] Festugière によると，［b］と［c］がそれぞれ［b´］「すべての本当に善いものは〈有害ではないもの〉である」，［c´］「すべての〈有害ではないもの〉は〈害さないもの〉である」と肯定命題に転換できることを述べている（同様に，［d］と［e］も転換できるだろう）。これに対して Baltzly, Finamore & Miles の解釈によると，次のことが言われているとされる。すなわち，まず［a］と［b］から［C.1］「いかなる神も有害ではない」が帰結する。次いで，［c］を肯定命題に転換した［c´］「すべての害するものは有害である」と［C.1］から［C.2］「いかなる神も害さない」が帰結する。さらに，［e］を肯定命題に転換した［e´］「すべての〈悪／害の原因〉は害する」と［C.2］から，「いかなる神も悪／害の原因ではない」が帰結する。

これが，この［推論の基礎となる］[18]公理である。

［b］本当に善いものは有害ではない。

実際，［本当に善いものは］善においてその本質存在を与えられており（οὐσίωται），［単に］何かある観点で善いのではないのだとすれば（本当に善いものとして措定されたのだから），害する能力をもたないのである。というのも，この［害する］能力をもっているのならば，［善と］反対のものを分有することになり，もはや本当に善いものではないことになるだろうからである。実際，反対のものを分有する他のいかなるものも，そう［本当にそうあるもの］ではないことになるだろう。というのも，能力（可能態）においてであれ活動（現実態）においてであれ醜を分有するものは，本当に美しいものではないからである ── いやしくも「本当にそうあるもの」と「本当にそうあるわけではないもの」とが正しく区別されたのならば。ともあれ，本当に善いものは，害する能力のような，善と反対のものに関わる能力をもたないがゆえに[19]，有害ではないのである。

［29.16–27］彼は次のように言う。

［c］有害ではないものは決して害さない。

では，これら［「有害ではない」と「害さない」］は，いかなる意味で異なるのか。けだし，一方，すなわち前者［「有害ではない」］は［害する］能力を取り除いたものであり，他方［「害さない」］はさらに余分に[20]［善と］反対の活動を取り除いたものである。というのも，害さないとしても害する能力をもっていれば，そのものは有害であると言われるが，害すると言われるのは，

[18] Festugière は「次の前提命題（［b］）の基礎となる公理」ととっている。

[19] 底本に従い διότι を挿入。

[20]「さらに余分に」と訳した ἐκ πολλοῦ τοῦ περιόντος は，古代後期にしばしば見られる語法である。

すでに［害を与えるという］活動を行っているものだからである。したがって，熱しうる［熱する能力をもっている］もの（θερμαντικόν）と熱するもの（θερμαῖνον）が異なるのと同じように，有害なものと害するものは異なるのである。このような事例のすべてにおいて明らかなのは，活動するものは能力をもってもいるが，能力をもっているものが必ずしも活動するわけではない，ということである。したがって，何かが害するならそのものは有害でもあるが，その逆は成り立たない。そこで彼は，［「すべての害するものは有害である」という命題からの］否定を伴う換位によって（σὺν ἀντιθέσει […] ἀντιστρέψας）「有害ではないものは決して害さない」という命題を把握したのである。

［29.27–30.21］彼は次のように言う。

> ［d］害さないものはいかなる悪をも為さない。

というのも，これらの外延は互いに等しいからである。すなわち，何かが害するなら，それは害されているものに何らかの悪を与えており，何かが悪を為しているなら，［悪を］被っているものを害しているのである。これが真であるということは，害の定義から把握できるだろう。というのも，彼は［『国家』］第一巻において[21]，害とは，何かをその固有の徳に関してより劣悪にするものである，と定義したからである。しかし，［害が何かを］より劣悪にするのであれば，それは害されるものを悪くする（κακύνει）ことは明らかである。よって，

> 何かが決して害さないならば，それはいかなるものをも固有の徳に関してより劣悪にすることはない。
> いかなるものをもその固有の徳に関してより劣悪にすることはないならば，それはすべてのものについて，その内のいかなるものをも悪くする

[21] プラトン『国家』335b6–c2。

ことはない。

〈すべてのものについて，その内のいかなるものをも悪くすることはないならば〉[22]，それはいかなるものに対しても何か悪を為すことはない。

というのも，何か悪を為すものはその受け手を悪くしているからである。そしてまた，これら，すなわち「害する」と「悪を為す」は置換可能であると思われる ── ただし，一方［「悪を為す」］は分有されるものとの関係で，他方［「害する」］は分有するものとの関係で言及されている（ἀναφέρεσθαι）のではあるが。実際，「悪」は分有されるものである一方で，「害される」のはこれ［悪］ではなく，その内にこれ［悪］が内在する当のものである。したがって，それ［害］は基体を「害する」が，基体に内在するところの「悪」を為す［もたらす］のである[23]。例えば，何かが病を為す［もたらす］とき，それが害するのは病ではなく，病を得たものである。そこで，いかなる悪も離在するものではなく，どんな場合でも他のものに内在するのだから，何か悪を為すものはすべて，前からあったその悪の基体を害するのだということは明らかである。こうして，「害さないものはいかなる悪をも為さない」と述べるとき，彼はそのことを，そうした［害さない］ものは［α］いかなる基体をもより劣悪な状態にすることもなければ，［β］その基体の内に自然本性に反した状態を為す［もたらす］こともない，という論拠にもとづいて把握しているのである[24]。以上のように，この［「害さないものはいかなる悪をも為さない」という］命題の諸項もまた区別される。

---

[22] 底本に従いバーゼル版（b）にもとづき εἰ μηδὲν κακύνει τῶν πάντων を挿入。

[23] ποιεῖ δὲ κακὸν τὸ ἐν τῷ ὑποκειμένῳ をこう解する。あるいは「基体に内在するものを悪くする」（Festugière, Abbate）とも解せるか。

[24] ［α］は分有するもの・基体の観点から，［β］は分有されるもの・基体に内在するものの観点から，それぞれ述べていると考えられる（Baltzly, Finamore & Miles）。Festugière と Abbate はこの文章を異なる仕方でとり，「そうした［害さない］ものはいかなる基体をもより劣悪な状態にすることはない，という論拠にもとづいて「害さないものはいかなる悪をも為さない」と述べることで，彼は，その基体の内に自然本性に反した状態を為す［もたらす］こともない，と言わんとしている」と読んでいる。

［30.21–31.2］彼は次のように言う。

［e］いかなる悪をも為さないものはいかなる悪の原因でもない。

というのも，もしそれが何らかの［悪の］原因だとしたら，それは悪を為す能力をもつことになり，したがって，そのような［悪を為す］活動をもいつかもつことになるだろうからである。そこで，能力をもつものをすでに活動していると仮定するならば，何らかの悪の原因であるものは何らかの悪を為すものとなるが，そこから，決して悪を為さないものが何らかの悪を為すということが帰結する。しかし，この不可能な帰結は，能力をもつものをすでに活動しているとみなした先の仮定から導かれたのではなく（可能なことから不可能な帰結は導かれないのだから），むしろ，決して悪を為さないものが何らかの悪の原因であると述べたことから導かれたのである。よって，それ［決して悪を為さないもの］はいかなる悪の原因でもないということは真である。こうして，この推論は次のように結論する。

［f］すべての神はいかなる悪の原因でもない。

［指針 I-2「すべての神はただ諸々の善のみの原因である」（31.2–32.13）］

［31.2–13］以上の推論に続く推論は，上述の議論と対立する事柄 ── その否定の側を彼は把握したところだが ── を通じて，すべての神はただ諸々の善のみの原因であるということを示している[25]。二つの推論がこの順序で ── すなわち，先に神々から劣悪な事柄を除去する推論があり，第二に優れた事柄を神々に付加する推論がある，という順序で ── 並んでいるのは正当である。というのも，諸悪の原因ではないことは神々のみに特別な優越性ではないが（実際，山羊鹿［空想上の生き物］[26] も諸悪の原因ではない），すべて

[25] プラトン『国家』379b11–14。
[26] アリストテレス『自然学』208a30 他。

の善の原因であることは神々に特別な優越性だからである。そこで，第二の議論は以下のようなものである。

［a］すべての神は本当に善いものである。
［b］本当に善いものはただ有益であるのみである。

というのも，「有益」は益する能力を意味し，「有害」に対立するからである。実際，有益なものと益するものは異なる。というのも，食物はたとえ［実際に益する］活動をしないとしても，有益なものではあるからである。

［31.14-20］それゆえ，次のように議論を進めることができる。

［c］ただ有益であるのみのものはただ益するのみである。

事実，ただ有益であるのみのものであれば害することはなく，総じて有害なものでもない。さらには，それが決して益することはないということも可能ではない。というのも，［そうなることが］可能なものは［実際に］そうなることを許容するからである。そこで，それ［有益であるもの］が［実際に］そうなった［決して益することはない］と仮定されたならば，決して益することはないものがいつか益するだろうことになってしまうが，これは不可能である。しかし，その［不可能なことが帰結した］理由は，その［可能なものが実際にそうなったとする］仮定にあるのではなく，益することが可能であるものを決して益することはないと仮定したことにあるのである[27]。

［31.20-29］ところで，

［d］ただ益するのみのものはただ善を為すのみである。

というのも，もし何らかの悪を為すものであれば害するだろうが，それはた

[27] 上の 30.26-30 と同様の議論。

だ益するのみだと前提されているからである。ここでも，これら二つの項の差異を知らなければならない。すなわち，「益する」は基体との関係で，「善を為す」は基体に内在するものとの関係で，それぞれその活動に言及するのである[28]。例えば，［益するものは］健康や徳を為す［もたらす］が，為された［もたらされた］もの［健康や徳］を益するのではなく，それらを分有するもの，すなわち，肉体や魂を益するのである。したがって，これら二つの項は，置換可能ではあるとしても，それぞれ異なるものとの関係で言及されているため，同じではないのである（まさにこの点に関して，一部の人々がこの推論を非難しているが）。

［32.1-3］この推論において残されている前提は，

［e］ただ善をなすのみのものはただ諸々の善のみの原因である。

である。以上から，

［f］すべての神はただ諸々の善のみの原因である。

という結論が導出される。

［32.3-13］われわれは第二の推論についてもすべての前提命題を通覧してきたが，プラトンは次のように述べ，ただ両端の前提命題のみを提示した。すなわち，

［b］すべての本当に善いものはただ有益であるのみである。

と，

［c/e］すべてのただ有益であるのみのものはただ善い行い（εὐπραγία）の

[28] 上の 30.7-15 と同様の議論。

みの原因である。

である。ただし彼はここで「すべての善」の代わりに「善い行い」を置いている[29]。それゆえ彼は実際，神は「人間にとって」ただ諸々の善のみの原因であると推論することになる。というのも，善い行いは人間においてあるからである。これは，行為もまた人間においてあるからであり，そしてこのことは，選択意志（προαίρεσις）もまた人間においてあるからである。これに対して，理性を欠いたものや魂を欠いたものにおいても，諸々の善はあるが[30]，行為はない。それゆえ，これらのものにおける諸々の善を「善い行い」と呼ぶことはないのである。

［指針 I の系「諸悪のイデアは存在しない」（32.13–33.7）］

［32.13–27］さてわれわれは，二つの推論の共通する出発点が何であるかを述べてきた。これに対して，二つの推論からいかなる系を帰結として引き出すことができるのかを今から述べるとしよう。すなわち，もし神がただ諸々の善のみの原因であり，すべての神がいかなる悪の原因でもないならば[31]，諸悪のイデアは存在しないということも同時に論証されたことになるのである[32]。実際，もしパルメニデスが述べたように[33]，すべてのイデアが神である

---

[29] プラトン『国家』379b13。以下の「人間にとって」という付加は，プラトン『国家』379c3–4 によるか。

[30] プラトン『国家』608d11–609b3 など。

[31] Kroll II p.472 の Addenda では，〈καὶ〉 κακοῦ もしくは κακοῦ 〈δὲ〉 という補いが提案されている。この提案に従って訳すと，「もし神 ── すなわちすべての神 ── がただ諸々の善のみの原因であり，いかなる悪の原因でもないならば」となる。

[32] プラトン『パルメニデス』130c5–d2 では，毛髪，泥，汚物などの無価値なものについてもイデアが存在すると考えるべきかどうか，という問いが立てられている。また，プラトン『国家』476a1–8 では，不正や醜と並んで悪についてもイデアが立てられているように見える。プロティノスの弟子アメリオスは悪のイデアが存在すると論じたとされるが（アスクレピオス『ゲラサのニコマコス『算術序説』注解』44.3–5 Tarán），プロクロスは悪のイデアが存在するという説を批判している（『プラトン『パルメニデス』注解』829.22–831.24，『悪の存立論』43–44 章）。

ならば，諸悪のイデアも神であることになろう。したがって，もし諸悪のイデアもまた神である一方で，すべての神がただ諸々の善のみの原因であり，いかなる悪の原因でもないのだとすれば，諸悪のイデアもまたただ諸々の善のみの原因であり，いかなる悪の原因でもないことになろう。しかし，いかなる悪の原因でもないものは，諸悪の範型でもない。というのも，範型は原因の一種だからである。しかし，諸悪の範型ではないものは，諸悪のイデアではない。というのも，すべてのイデアは範型だからである。よって，諸悪のイデアがまさにそれそのもの，すなわち諸悪のイデアではないということが帰結してしまうのである。

［32.27–33.3］また，諸悪のイデアが存在するならば，それに対して［目を向けて作る］作出者とはいかなるものだろうか。というのも，そのイデアが［諸悪を］作出するのではなく，むしろ何か他のものがそのイデアに対して目を向けることで作出するのだ，と言う人がいるかもしれないからである。しかし一方で，もし［その作出者が］諸悪のイデアを［範型として］もっている神だとすれば，神はいかなる悪の原因でもないのだから，［その神が諸悪を作出することは］不可能である。他方で，もしその作出者がこの世界の諸悪の一つだとすれば，範型を知っている者は皆その似像も知っているのだから，その作出者は悪を知りつつ作出することになるだろう。しかし，これは不可能である。というのも，『メノン』において示されたように[34]，諸悪を為す者は皆，不知によってそうするからである。

［33.3–7］以上，第一の指針に含まれていた二つの推論について検討した。その推論によると，神々について物語を語る際には，常に神々の善性を讃美し，［神々が］諸悪の原因ではないということを保たなければならないのである。

---

[33] Kroll はプラトン『パルメニデス』134c を参照しているが，直接関係しているとは思われない。プロクロス『プラトン神学』に見出されるように『パルメニデス』全体をプラトン神学の典拠とみなす新プラトン主義的な解釈によるか。

[34] プラトン『メノン』77c–78b。

［指針 II：序（33.8-17）］

［33.8-17］第二の指針に移ると[35]，それが二重であることにわれわれは気づくだろう。たしかに一方では，彼はその指針に共通の教説，すなわち，神的なものはいかなる仕方でも非受動的（ἀπαθές）である ── すなわち，変化することもなければ，変化するものであるかのように欺くこともない，ということにより ── という教説を示した［と言うこともできるだろう］。というのも，［変化することはもとより］後者［欺くこと］もまた，そのものに対してある種の受動性をもたらすからである[36]。実際，自発的に欺くことは非受動的ではないのである。しかし他方で，議論全体を［II-1］神的なものは真実のところは変化することがないという論[37]と，［II-2］神的なものは変化しないものでありながら変化するものであるかのように見る者たちを騙すことも欺くこともないという論[38]との二つに分割するならば，二つ目の指針が二重であると言うこともできるだろう。すなわち，［II-1］前者は，神的なものは変化しないものであることを示しており，［II-2］後者は，神的なものはただ真実のみを告げるものであり，あらゆる欺きや偽りから免れているものであることを示しているのだ，と。

［指針 II-1「神的なものは変化しない」（33.18-35.17）］

［33.18-24］では，この二つの論のうち前者はどのように示されているだろうか。彼はここでも，議論の前に以下のような公理を措定している[39]。

> 変化するものはすべて，自身によって変化するか（魂が選択意志によって悪くなったり徳をもつようになったりするように），他のものによっ

[35] プラトン『国家』380d1-383c5。
[36] 変化することの受動性については，以下 35.10-27 で理由が示されている。
[37] プラトン『国家』380d8-381e7。
[38] プラトン『国家』381e8-383a1。
[39] プラトン『国家』380d8-9。ただし，魂と物体の変化の例はプロクロスによる補いである。

て変化するか（物体が温められたり冷やされたりするように）のいずれかである。

これを措定した上で，彼は，神的なものもまた，もし変化しないものではないのならば，どちらか一方の仕方で変化しなければならない，と推論する。

［33.24–30］まずは，ある神が他のものによって変化すると仮定してみよう。ところで，変化を受けるものはすべて，変化させるものよりも弱いものである。一方は作用する側であり，他方は作用を受ける側だからである。しかし，すべての神的なものはもっとも力のあるものであり，弱さは質料的受動性であるため神々から遠く隔たっている。よって，神々の内の何者か[40]が他のものによって変化を受けることはない。というのも，［神々は］より力のあるものを決してもたないが，他のものによって変化を受けるものは何かより力のあるものをもつからである。

［33.30–34.15］しかし，この議論は神をただ一つのものとしているように思われるかもしれない。というのも，多数のものが存在する場合には，その中により力のあるものが存在するからである。だがむしろ，より力のあるものは存在するが，それは「より弱いもの」よりも力があるというわけではなく，「固有の揺るぎない力をもつもの」よりも力があるのである[41]。というのも，太陽的な知性は，デミウルゴスがもっているかの力をもってはいないが，それゆえに弱いわけではなく，固有の形相においては最高度の力をもっているからである。したがって，弱いものが弱いのは，固有の力の欠落（ἀπόπτωσις）のゆえにであって，より強いものとの関係での減退（ὕφεσις）の

[40] 写本には τι τῶν θεῶν とあるが，底本に従い τις τῶν θεῶν と改変（τι の方を Kroll の提案とする Baltzly, Finamore & Miles の記述は誤り）。もしくは θεῶν を θείων と修正すべきか（Kroll）。

[41] プロクロスは，「一」の階層に多数の神々（ヘナデス）が座し，それらの間の序列に即した「減退」による力の点での差異があることは認めつつも（『神学綱要』命題 126），下位の神が上位の神よりも（固有の力を欠いているという意味で）「弱い」ものであることも上位の神によって変化を受けることも認めない。

ゆえにではない。というのも，もし後者だとすれば，一つのものを除くすべてのものが弱いものとなり，そして，もし弱さが悪であるのならば，一つのものを除くすべてのものが悪を分有していることになってしまうだろうからである。しかし，減退はいかなるものにとっても悪ではない。というのも，[それぞれのものは] その減退に即して本質存在を与えられている（οὐσίωται）からである。したがって，もし減退の意味での「弱さ」が本質存在的要素（οὐσιῶδες）であるならば，そして，もしすべての悪が，それが悪である限りにおいては本質存在的要素ではないのであれば（というのも，本質存在的要素は自然本性に即したものであるが，悪は自然本性に反したものであるから），減退も，その［減退の］意味で「弱い」ものも，悪ではないことになるだろう。むしろ，何かが自身に帰属するはずの力をもっていないとき，そのときの力のなさが悪なのである。

[34.15–35.5] 他のものによって変化するものは，固有の力を欠いているのだから，このような力のなさをもつことは必然である。したがって，もしすべての神的なものが自身の位階においては最も力のあるものであり最善のものであるのならば，たとえ［その神的なものどもの中では］他のものが他のものよりも力があるといったことはあるとしても，下位のものが上位のものによって何らかの変化を受け入れることは決してない。というのも，かのもの［上位のもの］は格上の仕方で（μειζόνως）最善のものではあるが，いかなる最善のものも，［自身と］似たものを変化させることはなく，むしろ格上の仕方でそれら［自身と似たもの］の最善のあり方を保全するものだからである。実際，変化させるものはすべて，どんな場合でも，変化を受けるものを自身と似たものにする。したがって，もしより優れたものがより劣悪なもののいずれかを変化させるのであれば，変化を受けるものを自身と似たものにするだろう。しかし，より優れたものと似たものにされるものは，より力のあるものとなるが，より力のあるものとなるものはより変化しないものとなる。よって，もしかのところで［神的なものどもの中で］より優れたものがより劣悪なものどものいずれかを変化させるのであれば，変化を受けるものはより変化しないものとなるだろう。しかし，これは不可能である。こうし

て，すべての神的なものは他のものによって変化しないものであることが示された。

［35.5-17］残るは，神的なものが変化するとして，自身のゆえにそうした変化を被るという可能性である。しかし，自身によって変化を受けるものはすべて，より優れたものに変化するか，より劣悪なものに変化するかのいずれかである。しかし，何ものも自らすすんで自身をより劣悪なものに変化させることは決してないだろう。というのも，そうした変化を被るものはすべて，善についての無知ゆえにそれを被っているのは明らかだからである。他方，何かが自らをより優れたものに変化させる場合は，変化の前には固有の善を欠いているために，そのような変化を選ぶのである。以上の双方の論から，われわれは神的なものに，意に反した活動か諸々の善の欠如かのいずれかを帰することになるだろう。しかしながら神々には，最善の知と自足した生の両方が存している。よって，神々は，何らかの善を欠いていることもなければ，自らの意に反したことを何か被ることもない。そうであれば，神々は，他のものによって変化することがないのと同じように，自分自身によって変化することもない，ということになる。

［指針 II-1 の系（35.17-36.9）］

［35.17-36.9］以上の議論にもとづいて，ここでも，以下のような系を把握するがよい[42]。すなわち，神々は，物体ともわれわれの魂とも[43]，本質存在を同じくするもの（ὁμοούσιοι）ではない，という帰結である。というのも，他のものによって変化することは，すべての物体に相応しく，自身によって変化することは，われわれの魂に相応しいからである。したがって，『法律』[44]

[42] 以下の系をプラトン自身が導いているととるのは難しいため，Festugière 他に従い，写本の λαμβάνει（「彼は把握している」）を λάμβανε と改変（Kroll もおそらく同様の理由から λαμβάνεται（「系が把握されている」）とする改変を提案している）。しかし，プラトン『国家』381c10-e7 においてこの系が論じられているとプロクロスが解釈した可能性もある。

[43]「われわれの身体と魂のいずれとも」ともとれる。

において神々の魂は自己運動 ── 様々な変化の中で第一番目のもの ── によって自身を動かすと言われている以上，われわれは次のように述べるだろう。すなわち，かの種類の変化は，より優れたものに向かうものでもより劣悪なものに向かうものでもなく，むしろ，ある思惟から別の思惟へと移行する生命であり，その際，同一の完成態が保たれているのだ，と。それゆえ，かの変化のことを変化せざるものと呼ぶ人々もいるのである。それは固有の善から離れる変化ではなく，アリストテレスが天の運行について述べたように[45]，常に完成態にある変化だから，というのがその理由である。しかし，これに続く議論を吟味するために[46]目下の議論が前提したのは，動かされる事物の性質変化を伴う変化であり，移行の意味での変化ではない。これに続くのは，後に見るように，神々は人間と交渉したり人間のもとを訪れたりする際に人間や何か他の動物に変化する，と語る者たちを論駁する議論である[47]。しかるに，神々が性質変化を受けることは不可能であるが，移行を伴って生きることは可能であり，それはこの移行が性質変化を伴わないからである。それはちょうどわれわれが，前述の可視的事物［天体］についても，性質変化なしに場所的移行を受け入れる，と言うのと同様である。他方，性質変化を同時に伴う移行は，上昇したり下降したりする部分［個別］的（μερική）な魂[48]に属するものであり，それはちょうどこの種の移行が質料を含む物体に属するのと同様である。

---

[44] プラトン『法律』894c 以下。

[45] アリストテレス『気象論』339a25–26。

[46] Festugière と Baltzly, Finamore & Miles は，διὰ τὴν τῶν ἑπομένων ἐξέτασιν を「［このことは］これに続く箇所を検討することで［分かる］」と補って訳している。

[47] プラトン『国家』381c10–e7。諸訳は ἔπεται … ὡς μαθησόμεθα διελέγξαι を「これに続いて，……を論駁することをわれわれは学ぶだろう」と訳しているが，ὡς μαθησόμεθα は「後に見るように」という意味で挿入的にしばしば用いられる（プロクロス『プラトン『ティマイオス』注解』III 58.22 Kroll 他）。ここでは以下 39.1–40.5 を予告しているか。

[48] プロクロスにおいて，個々の人間の魂のような多数の「部分［個別］的な魂」は，単一の「全体［普遍］的な魂」から分かたれたものと考えられている。

［指針 II-2「神的なものが欺くことはない」（36.10-27）］

［36.10-18］以上の議論により，すべての神が変化しないものであることが示された。残るは，以下の点を考察することである。すなわち，神自身は自らによっても他のものによっても変化することはないとしても，それにもかかわらず，われわれを魔術師のような仕方で欺き[49]，実際とは異なるあり方で現れるということはないのかどうか，という点である。そこでここでも，次の公理がその前提として措定されたことにしよう[50]。

> 欺くものはすべて，［a］自らの内に偽りを保持しており，［それ自身］欺かれているがゆえに，他のものを欺くのであるか，あるいは，［b］自らは真実を知っているが，他のものに対する活動を通して欺くのであるか ── それ以外の仕方では，敵を負かすことが不可能であるか，あるいは，友の役に立つことが（その友が分別を欠いていて真実［を伝えること］によって益することはできないために）不可能であるがゆえに ── のいずれかである。

［36.19-27］［a］では，神々は自らの内に偽りを保持しており，それゆえ欺くのだろうか。それは不可能である。というのも，このような偽りはすべて，人間たちにも神々にも憎まれるものだからである。実際，自らの内にこのよ

---

[49] プラトン『国家』380d1。

[50] 以下では動詞 ἀπατάω, ἐξαπατάω の能動態と受動態が用いられており，その関係が明確になるようにそれぞれ「欺く」「欺かれる」と訳したが，受動態は「他者によって欺かれた」という意味だけではなく「思い違いをする」という意味にもなる。なお，プラトン『国家』の対応箇所（381e8-383a1）で基本的に用いられている動詞は ψεύδομαι であり，この語の場合には能動の意味になる中動相（「欺く，嘘をつく」）と受動相（「欺かれる，思い違いをする」）との区別がつかないため，納富が指摘しているような解釈上の問題が生じているが，プロクロスにおいてはその問題はあらかじめ解消されている（あるいは，大多数の解釈者とは異なりプラトンの対応箇所を一貫して中動相で読む納富の提案が正しければ，プロクロスはプラトンのテクストの本来のニュアンスを捉えそこなっていることになる）。

うな意味での欺きを保持したいと望む者は，誰もいないだろう。欺かれることはあらゆる者にとって意に反したことだからである。[b]では，神々は[自らは]欺かれているわけではないのに，他の者たちを欺くのだろうか。しかし，これも不可能である。というのも，神々にはいかなる敵も存在しなければ，分別のない状態にある友も存在しないからである。よって，欺くことはいかなる仕方でも神々には相応しくない。すなわち，それ自身が欺かれるという仕方でも相応しくなければ，欺かれる者の友であるという仕方でも敵であるという仕方でも相応しくないのである。

[まとめ（36.27–37.2）]

[36.27–37.2] さて以上が，神々についての物語を作る際に従うようプラトンが望む指針であり，それは次の三点を保持するものである。

[I] 神的なものは善いものであり，ただ諸々の善のみの原因である。
[II-1] 神的なものは変化することがない ── 他のものによっても自らによっても変化を受けることがないのだから。
[II-2] 神的なものは真実を告げるものである ──［それ自身］欺かれているがゆえに欺くこともなければ，欺くことそのもののために欺くこともないのだから。

[第二部：アポリアとその解決（37.3–41.2）]

[アポリアの提示（37.3–22）]

[37.3–8]プラトンによって示された以上の点のうち，第一の点に関しては，諸悪はどこに由来しているのか，というアポリアがある。実際，諸悪がもし神に由来しているのであれば，神的なものはただ諸々の善のみの原因であるということを示す議論は虚偽となる。他方で，諸悪がもし他のところに由来しているのであれば，一方でそのもの［諸悪の原因である他のもの］が神に由来しているとすれば，なおのこといっそう神的なものが諸悪の原因である

ことになるし，他方で［その諸悪の原因である他のものが］神に由来していないとすれば，一方は諸々の善の始源，他方は諸悪の始源というように，始源が一つではなく複数あることになる。

［37.9–15］第二の点に関しては，神々の顕現（αὐτοφάνειαι）はどうして生じるのか［というアポリアがある］。神々は，ある時には形姿を欠いた光（φῶς）として，またある時には形姿をもつ光として現われるからである。実際，これらのものを認めないならば，われわれは神官術の全体と神働術師の業とを，そしてこれらのものを措くとしても，時によって異なる姿形で現出する神々自身による顕現を，いずれも転覆させることになる[51]。したがって，何らか神的なものが変化することなくどうして多様な形姿で目撃されるのか，というアポリアが生じるのである。

［37.15–20］第三の点に関しては，神託を授ける者たちが偽ることはないとすれば，虚偽の神託はどうして与えられるのか［というアポリアがある］。あらゆる神託所は，こうした虚偽の神託で満ちているからである。また，善が真理よりも優先され，神々が時には善のゆえに偽りをなし，真理をただちに手にするに相応しくない者たちを欺く，といったことはどうしてないのだろうか［というアポリアもある］。

［37.20–22］実際，上述の議論は必然的な論理を通じて論証されたのではあるが，それにもかかわらず以上のようなアポリアに人は陥りうるだろう。

［アポリアⅠの解決「諸悪はどこに由来しているのか」（37.23–39.1）］

［37.23–38.3］さて，以上の点については他の著作でもっと詳しく語ったが[52]，よければここでも第一のアポリアに関して手短に，次のように論じて

[51]「神働術（テウルギア）」（「神官術（ἱερατική）」とも呼ばれる）とは，この世界に神々が顕現しその業を揮うことを可能にするための，様々な宗教的実践のことである。プロクロスは新プラトン主義の中で，魂を浄化し神々と合一させるための手段として神働術を重視するイアンブリコス以来の流派に属する（ダマスキオス『プラトン『パイドン』注解 I 172.1–3）。

[52] この箇所に付けられたスコリアは，次のように注記している。

おくことにしよう。すなわち，悪は神からも，他の何らかの主導的な原因からも，存在者の内に迎え入れられることはない，と[53]。というのも，諸悪のイデアを導入することも，質料が諸悪の原因であると論じることも，いずれも可能ではないからである。実際，すべてのイデアは神的かつ知性的[54]であり，諸実体もしくは諸実体の内の完成を司る。そしてまた，質料は宇宙にとって必要やむをえないもの（ἀναγκαία）である限りにおいて神々からもたらされた（παρῆκται）のであるが，万有の生成に貢献するものであるからそれは悪を為すものでもなく，全体の内で最後のものであるからそれは善いものでもなく，むしろそれはその位置を必要やむをえないものどもの内に有している。というのも，何かのためにあるものはすべて，このような［必要やむをえない］ものだからである。

［38.3-22］したがって，諸悪については，その形相的原因も質料的原因も，あるいは一般にその単一の始源も想定すべきではなく，むしろ，プラトン自身が言ったように[55]，部分［個別］的で分散された［諸原因］が，それら［諸悪］に対して派生的存立（παρυπόστασις）を授けるのだと論じるべきである。

（α）諸悪の存立についての一巻本において。

（β）ディオティマの論説に対する注釈において。

（γ）諸悪の存立については，『テアイテトス』「しかし悪が滅びることは可能ではない」［176a4］に対する注釈において述べられている。

（δ）また，第三エンネアスに対する注釈において，悪はどこに由来しているのかが述べられている。（II 371.12-18 Kroll）

このうちムルベケのグイレルムスによるラテン語訳により現存するプロクロス『悪の存立論』（上記の（α））には，以下の議論と対応する多くの箇所が見出される。プロクロスは，プロティノス（I，8［51］）に見られるような質料を悪の起源とみなす考え方を批判し，悪が自体的に存在することはなく，何らかの善を目指す活動に付帯して生じるにすぎないと論じ，こうした悪のあり方を「派生的存立（παρυπόστασις）」と呼んでいる。

[53] 底本に従い δέχεται を補う。

[54] ここでの νοερά は νοητά（「可知的」）の意味で用いられていると考えられる。

[55] プラトンのどのテクストを指すのか明確ではない。Kroll は『ティマイオス』48a，68e，Abbate は『ポリティコス』269d 以下の神話的宇宙論を挙げている。あるいは，Baltzly，Finamore & Miles が言うように，すぐ後で引かれる『国家』379c6 のことを念頭に置いているだけなのかもしれない。

［諸悪の諸原因が］部分［個別］的であるのは，知性や魂や物体のように全体的なものではないためであり，多数であるのは，一なるものではないためである。このことのゆえにプラトン本人も，「それら［諸悪］については何か［神以外の］他の諸原因（ἄλλ᾽ ἄττα［…］τὰ αἴτια）を求めるべきだ」[56] と述べているのである。実際どんな場合であれ，もし物体が悪を分有しているならば，その物体の内には何らか不和状態にある諸要素が存在していて，それらが互いに対して不均衡な状態にあり，その各々が他のものを打ち負かそうとするために，病気が派生的に存立する（παρυφίσταται）のである。また，もし魂が悪を分有しているならば，その魂の内においても不和状態にあり何らかの仕方で反対状態にある生の諸形式が存在していて，それらが相互に対抗し合い，その各々が各自の分を守ら〈ない〉ために[57]，何らかの悪が入り込むのである。実際，物体は対抗し合うものからなるそのような［悪を分有する］ものであるほかなかったが，それは，何か消滅しうるものもまた存在するためであり，そしてまた，宇宙があらゆるものからなる完全なものとして成立するためであった。また，この世界には諸々の魂の混じり合いもまた存在するほかなかったが，それは，この世界が理性的な生きものを欠くものとはならないためであり，そしてまた，理性的な生きものが中間物なくして物体の内に生み出されることのないようにするため ── すなわち，欲求すること，感覚すること，表象することといった，非理性的な生きものに属する活動を為したり被ったりするため ── であった。というのも，これらのことは，死すべきものどもにとって，たとえ短期間であろうとも，生き残るためには必要だからである。

---

[56] プラトン『国家』379c6（「諸原因」と複数形で言われている点にプロクロスは注目している）。

[57] 伝承されたテクストは ἑκατέρου τὸ ἑαυτοῦ πράττοντος となっており，諸訳はこれを「その各々が自分の利益を優先するために」というような意味で訳している。しかし，τὸ αὑτοῦ πράττειν はプラトン『国家』において，国家の諸階層や魂の各部分が「自分の分を守る」という意味で用いられ，正義の規定に含まれることになる重要な表現であり，これをプロクロスが正反対の意味で用いるとは考えにくい。ここでは，否定の語が脱落したと考え，それを補って ἑκατέρου τὸ ἑαυτοῦ 〈μὴ〉 πράττοντος と読む。

［38.22–29］したがって，諸悪は存在者の主導的な活動から派生的に存立するのであって，善以外の他の何かのゆえに生じるわけではない。そして，万有はこれら派生的に存立するものどもを必要に応じて用い，それらの方もそれらを用いるものどもの力によって善いものとされるのである。それゆえ，いかなる悪も，純然たる悪ではなく，むしろ善の痕跡[58]を分けもっているのである。したがって，悪もまた何らかの仕方で善いものである限りでは神に由来しており，しかも，他の部分［個別］的で多なる諸原因によって生じたものではあるが，それら多くのもの自体[59]にとっても挿話的（ἐπεισοδιῶδες）[60]に生じたものなのである。

［38.29–39.1］諸悪に関する探求に対しては以上のことが論じられ，その議論によって神々は諸悪の原因ではないということが明らかにされている。

［アポリア II の解決「神々の顕現はどうして生じるのか」（39.1–40.5）］

［39.1–17］［神々の］顕現に関する第二のアポリアに対しては，以下のように述べられるべきである。すなわち，神々自身は不変のままにとどまり，何ものをも自らに加えたり失ったりしない一方で，神的な幻影が，われわれの周囲の場所において生成を受け取ることによって，映し出される（προβάλλεται）のである，と。というのも，見る者たちは身体を用いているが神々自身は身体をもたないため，神々から相応しい者たちに提示されるヴィジョンは，提示する者たち［神々］に由来する要素をもっている一方で，見る者たち［人々］と同族の要素ももっているからである。（それらが見られはするものの，すべての人々によって見られるわけではないのも，そのためである[61]。という

---

[58] Kroll II p.472, Addenda では，Radermacher による ἀγαθοῦ から τἀγαθοῦ への修正が提案されているが，採らない。

[59] Festugière, Abbate はおそらくこれを「部分［個別］的で多なる諸原因」ととっている。これに対して Baltzly, Finamore & Miles は，それら諸原因によってもたらされた産物の方を指しているのではないかと提案している。

[60]「挿話的」とは「本質的な連関を欠いている」という意味（アリストテレス『形而上学』1076a1，『詩学』1451b31 他）。

[61] Festugière に従い 39.11 で本筋に戻るととる。

のも，見る者たち自身にとっても，それらは魂がまとう光輝く着物によって見られるからである[62]。事実，目が閉じられているときでも，それらはしばしば見られるのである。）したがってそれらは，延長をもつものである限りでは，そしてそのような［延長をもつ］空気の異なる箇所に現出する限りでは，見る者たちと同族のものとして存立している。しかし他方で，神的な光を映し出したものである限り，効力をもつ限りでは，そしてまた，明白な象徴（σύμβολα）を通して神々の力を表現している限りでは，それらを提示しているより優れた者たち［神々］自身に依拠している[63]。それゆえ，かのものどもの言表不可能な符牒（συνθήματα）は，それぞれ異なる姿形を映し出したものとして，型を与えられるのである。

［39.17-22］『［カルデア］神託』もまた，神働術師に対して次のように明白に語ることで，このことを明らかにしている。すなわち，すべての神的なものは身体をもたないが，「身体はお前たちのためにそれらに結わえ付けられたのだ」[64]，なぜなら，「お前たちがそこへと接ぎ木された」身体的な「自然本性」のゆえに[65]，非物体的なものどもに非物体的な仕方で与かることが不可能であるから，と。

［39.22-40.5］したがって，それら［神的なヴィジョン］は神々の意志に応

[62] 新プラトン主義では，非物体的な魂と物体的な身体を媒介するものとして，両者の中間的な性質を有する「魂の乗り物（ὄχημα）」と呼ばれる存在が想定された。プロクロスにおいては，「光輝く（αὐγοειδές）・星のような（ἀστροειδές）」と呼ばれる永続的なものと，「プネウマ的（πνευματικόν）」と呼ばれる可滅的なものが区別され，これらと「貝のような（ὀστρεῶδες）」と呼ばれる物体的な身体が対比されている（『神学綱要』命題 196，205-210，『プラトン『ティマイオス』注解』III 236.31-237.31，297.27-300.13 Kroll）。ここでの「光輝く着物」はもっとも優れた「光輝く」種類の「魂の乗り物」への言及だと考えられ，魂はその「魂の乗り物」によって物体的な身体を介することなく知覚できると説かれている。

[63] この世界の様々な事物・言葉・行為は，それぞれ特定の神格の「象徴・符牒」を宿しているとされ，神働術はそれを媒介として行われた。

[64] 『カルデア神託』断片 142 des Places（プロクロス『プラトン『国家』注解』II 242.8-12 Kroll）。

[65] 『カルデア神託』断片 143 des Places。

じて現れたり現われなくなったりするが，彼ら自身［神々自身］は現われることのないものであり，それら幻影から何かを自らに加えることも変化を受けることもなく，あるがままにとどまっているのである。それはちょうど，イデアに即して存立するものが物体的なもの，合成的なもの，姿形をもつものとして存立するからといって ── そのような［物体的・合成的・姿形をもつ］ものではないかのもの［知性的なイデア］に由来するにもかかわらず ──，知性的なイデアが同じように物体的なものとなることも合成的なものとなることも姿形を与えられたものとなることもないのと同じことである。したがって，すべての神は，姿形のある仕方で目撃されるとしても，姿形のないものである。というのも，その姿形は神においてあるのではなく，神に由来してあるからである。それは，目撃する人が姿形のないものを姿形のない仕方で見ることが不可能であり，その人の自然本性に応じて姿形のある仕方で見るためである。以上で，二つ目の探求についても語られたとしよう。

［アポリア III の解決「虚偽の神託はどうして与えられるのか」（40.5–41.2）］

［40.5–41.2］三つ目のアポリアに対しては，以下のように応答しなければならない。すなわち，偽りは神託を授ける者たち[66]においてあるのではなく，神託を受け取る者たちにおいてあるのである。というのも，いずれの神託においても，神託を授ける者は欺くことも欺かれることもなく，神託を授かる者たちが，彼ら自身の適性のなさや弱さのゆえに，神託を異なった仕方で受け取るからである。とはいえこのことは，神託を授ける者たちの意志に反して生じているわけでもない。というのも彼らは，神託を授かる者がそれに値する人々であって，その人々に見合った事柄のみを手に入れることを望んでいるからである。しかし，一部の人々にとっては，彼らのもとに純粋な形で据えられた真実を知ることは相応しくないのであり，むしろ，彼らのもとにやって来て彼らにおいて存立する偽りを通して，彼らにとって相応しいこと

[66] 以下，「神託を授ける者たち」は神々自身を指すと考えられるが，神託を伝える人々を指すとも解しうる。

を被ること［が相応しいのである］。したがって，［神託を授ける者たちは］真理を知らないわけでも隠しているわけでもなく（それは彼らのあり方に悖るものであるから），むしろ，それに与かる者たちのゆえに隠されてしまった真理を，そのように真理を隠した張本人である［神託を受け取る］人々の利益のために用いているのである。真理を受け取る際には，受け取る者たちが捻じ曲げてしまうために，その通りに手に入れることができず，むしろ異なる仕方で手に入れてしまうということが起こりうるのだが，その要因となる適性のなさとは何であるのかについては，『［カルデア］神託』についての著作においてもっと詳しく述べられている。また，神託所における記録も，次のように彼らが説くなかで，その点をわれわれに証言している。すなわち彼らによると[67]，神託が与えられる場所や時機や様式のゆえに，あるいはその他の何らかの過誤のゆえに，神託において偽りが派生的に存立する。というのも，他のより本来的な原因による場合は措くとしても，質問が正しくなされないことからも，このことは生じるからである ── ただし，その原因は下方からのものであり，神々自身はというと，上方から常に真実を，それを手に入れることが可能な者たちに対して，提供しているのである。

［第三部：結論と補足（41.3–29）］

［41.3–11］さて，以上の点については他の場所でも然るべき検討がなされたが，それらすべてから次のことが示された。神学的規範（νόμοι）は二つあり，そのうち第二の規範は二重のものであるため，指針は全部で三つあることになる。すなわち，それぞれ，［I］ただ善を成すこと（τὸ ἀγαθουργόν）のみを，［II–1］（自らによっても他のものによっても）まったく変化しないことを，［II–2］あらゆる活動において真実を告げることを，神々に帰するように求める指針である。そしてこれらは，すでに述べたように，『法律』第十巻における［神々を特徴づける］三つのもの ── 善性，能力，知 ── に合致する[68]。

[67]「彼ら」の指示対象は不明確だが，Festugière は神託所の公式の解釈者と解している。

［41.11–29］しかし，プラトンは真理に関する議論において，神的なものだけではなくダイモン的なものもまたあらゆる点において偽ることはない，と付け加えたのだから[69]，この付加にもとづいて次のことを把握しなければならない[70]。すなわち，真にダイモン的なものは，あらゆる点において偽ることはない，と（ただし，獲得様態において（κατὰ σχέσιν）ダイモン的なものは[71]，その限りではない。それは，多種多様な変化を受け入れ，誰であれ親しくなった者たちを欺きもするから）。本質存在において（κατ᾽ οὐσίαν）ダイモン的なものはいずれも，それが理性的なものであれば，どんな場合でも真実を告げるものであり，それが非理性的なものであれば，真理も虚偽も受け入れないものである。それゆえ，プラトンもまた，ダイモン的なものも神的なものもすべて「真実を告げる」ものであるとは言わずに，すべて「偽ることはない」ものであると言ったのである。それらはすべて虚偽を受け入れないものではあるからである ── ただし，一方［理性的なもの］については，本性上ただ真実のみを告げるものであるという意味で，他方［非理性的なもの］については，真実を告げることもなければ偽りを告げることもないものであるという意味ではあるが。したがって，欺きを行う類いのもの ── 神託を装ったり，召喚に応じたり，人々とおのずから交わったりもすると語られているもの ── はすべて，獲得様態においてダイモンであるものに属する。もし人々がダイモンに欺かれ，それが本当の意味でのダイモンであるならば，

---

[68] I 28.3–9 Kroll（プラトン『法律』900c–903a）。

[69] プラトン『国家』382e6。

[70] プロクロスは同時代の多くの人々と同じく，人間に様々な影響を与え，ときには通常の意味で害すら与えるダイモンの存在を認めていた。しかしプロクロスは，そうしたダイモンはそれ自体で悪しき存在ではなく，害と思われるものもその影響を受ける者のあり方に応じて然るべき罰などを被っているだけなのだと論じている（『悪の存立論』16–17章）。

[71] プロクロス『プラトン『ティマイオス』注解』I 77.11, III 158.27–30 Kroll,『プラトン『アルキビアデス』注解』70.3–7 Westerink では，人間の魂がダイモンの地位を得たものが「獲得様態においてダイモン的なもの」と呼ばれ，「本質存在（κατ᾽ οὐσίαν, καθ᾽ ὕπαρξιν）においてダイモン的なもの」と対比されている。

人々は自らゆえに欺かれているのであり，それらのダイモンゆえに欺かれているのではない。これは，神々に関してわれわれが述べたのとちょうど同じである。というのも，プラトンによって語られた虚偽のなさについての議論は，神々の場合にもダイモンの場合にも，共通に当てはまるからである。

【文献】

［Abbate］Abbate, M.（tr.）, *Proclo: Commento alla Repubblica di Platone: Dissertazioni I, III-V, VII-XII, XIV-XV, XVII*, Pavia: Bompiani, 2004.

［Baltzly, Finamore & Miles］Baltzly, D., Finamore, J. F. & Miles, G.（tr.）, *Proclus: Commentary on Plato's Republic*, vol. 1, Cambridge: Cambridge University Press, 2018.

［Chlup］Chlup, R, *Proclus: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012.

［Festugière］Festugière, A. J.（tr.）, *Proclus: Commentaire sur la République*, 3 vols., Paris: Vrin, 1970.

［Kroll］Kroll, W.（ed.）, *Procli Diadochi in Platonis Rem publicam commentarii*, 2 vols., Leipzig: Teubner, 1899–1901.

［Slings］Slings, S. R.（ed.）, *Platonis Respublica*, Oxford: Oxford University Press, 2003.

［納富］納富信留「「真実の虚偽」とは何か？―プラトン『ポリテイア』の虚偽論序説―」東京大学哲学研究室『論集』40（2021 年度），1–20

［藤沢］藤沢令夫訳『プラトン：国家（上・下）』岩波書店，1979

※本翻訳は JSPS 科研費（JP21K00024，JP22J00249）の助成による成果の一部である。本訳・注の一部に対して貴重なコメントを下さった長尾柾輝氏（東京大学）に感謝申し上げたい。